

国立国語研究所学術情報リポジトリ

「質問—応答」連鎖の応答発話に用いられる無助詞
「私〇」と「私は」

メタデータ	言語: ja 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2023-07-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金, 青華 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000011

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



「質問－応答」連鎖の応答発話に用いられる無助詞「私〇」と「私は」

金 青華

筑波大学 大学院生／国立国語研究所 共同研究員

要旨

本稿は相互行為上の一人称代名詞の役割を明らかにすることを目的とし、日本語母語話者が一人称代名詞を用いて、応答発話を組立てる現象を、会話分析の手法を用いて分析する。本稿では、主にいわゆるトピックマーカである「は」が付いている「私は」と助詞が付いてない「私〇」が用いられる応答発話を調べることにより、「私〇」と「私は」が相互行為上、異なる問題に志向していることを記述する。「私〇」は、応答者が質問行為の想定・前提などに何らかの不適切性があることを感知した時、その不適切性を生み出した情報を修正するものとして、自分に関する新たな情報を提供しているというスタンスを示すことが分かった。一方、「私は」は、質問によって応答者が何らかのグループに属する者として認識されていて、これに対し、応答者がそのグループに属する者であることは否定しないが、先行文脈で喚起した同グループのメンバーとは多少異なるタイプであること、または異なるタイプである可能性があることを示す際に用いられることが分かった*。

キーワード：一人称代名詞、助詞「は」、無助詞、質問－応答連鎖、会話分析

1. はじめに

日本語では話し手が自分に関して語る場合、談話の場面性や述語などの手がかりにより話し手自身が予測されるため、一人称代名詞を用いないことが多い(水谷 1985, 森田 1998 など)。しかし、ある特定の文脈では、話し手のことが語られていることが会話参与者に理解されているにもかかわらず、一人称代名詞が明示される場合がある。このような現象に関して、Ono and Thompson (2003) は、一人称代名詞が話し手を指す「指示機能」を果たすと同時に、それ以上の語用論的な機能を果たしていると指摘している。さらに「指示機能」を果たしていない一人称代名詞の存在も認め、非指示機能として「フレーム設定 (frame setting)」機能と「感情的 (emotive)」な機能を挙げている。この研究結果から、一人称代名詞は単なる話し手への言及を明確にするわけではなく、語用論的、相互行為的な機能を果たしていることが分かる。

そこで、本研究ではハーヴィ・サックス、エマニュエル・シェグロフ、ゲール・ジェファーソンを中心に開発された会話分析の手法 (Sacks, Schegloff and Jefferson 1974, Schegloff 2007 など) を用いて、「質問－応答」の連鎖の応答発話という特定の位置において、一人称代名詞——助詞「は」が付く場合(「私 1 は」)と、付いてない場合(「私〇」)——が使用されている事例を詳細に記述する。

* 本稿は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」(プロジェクトリーダー：小磯花絵)の研究成果であり、言語資源活用ワークショップ 2021 (2021年9月13・14日、オンライン開催)での発表(金 2021)を基に加筆修正を加えたものである。

¹ 日本語の一人称代名詞には、「わたし」、「あたし」、「わたくし」、「ぼく」、「おれ」、「うち」、「自分」など、さまざまな形式がある。本研究ではこれらの一人称代名詞を包括的な記号として「私」と表記する。また、分析対象となる一人称代名詞「私は」と「私〇」を網掛で示す。

それにより、「私は」と「私〇」の使用がどのように相互行為の組織に関わっているかということについて記述し、話し手が相互行為上の異なる課題に対して、それぞれ「私は」と「私〇」を用いて対処することを記述する。

一人称代名詞は、発話の中の様々な位置で生じうるが、本稿では「質問」に対する「応答」の位置に用いられる一人称代名詞を取り上げる。ここでいう「質問」とは、応答者に情報を提示することや、確認を与えることを要請する行為である。「質問」は様々な情報の提供・確認を要請しているが、本稿で収集した「私は」と「私〇」が用いられる応答発話のすべてのケースにおいて、質問が応答者に関する情報を要求するものであった。このことから応答として自分に関する情報を提供することが適切になる環境において、一人称代名詞が現れていることが分かる。本稿では、このような環境で、あえて一人称代名詞を明示して応答を産出することにより、応答者が何に「志向」(西阪 2008: 75)しているのかに関して記述する。

2. 一人称代名詞に関する先行研究

本節では実際の日本語会話における一人称代名詞の使用に関して研究した先行研究を紹介する。

まず、Ono and Thompson (2003) は、一人称代名詞が産出される動機から、一人称代名詞の使用には三つのタイプがあると主張している。すなわち、「指示機能を考慮したために (motivated by referential considerations) 使用された」一人称代名詞、「フレーム設定 (frame setting)」の一人称代名詞、および「感情的 (emotive)」な一人称代名詞である。彼らは「指示機能を考慮したために使用された」一人称代名詞の 90% が助詞を伴っていると指摘している。また、指示対象を明確にする場合と、指示対象が明確であるにもかかわらず、使用される場合があると指摘している。そして、非指示機能としての「フレーム設定」機能は、「後続の発話に対して主観的なフレームワークまたはスタンスを提供する」と主張し、「述語とは別の音調単位で発生する傾向がある」と示唆している (p. 336)。さらに、「感情機能」の場合は、「述語が話者の感情・感覚を表し」、無助詞で使用される傾向があると指摘している (p. 331)。

また、応答における一人称代名詞に注目した張 (2014) は、インタビュー形式の談話資料を用いて、質問者の意図との関係と応答発話の内容という点から一人称代名詞の使用状況を調べた。その結果、聞き手の期待や想定と相反する発言をする場合、および自分の経験や好みなどの自分の特性を述べる場合、一人称代名詞が明示されると提示している。他に、「私〇」と「私は」の使い分けに注目した荊宿 (2014) は、「私〇」のみが用いられる領域と、「私〇」と「私は」が両方用いられる領域があると主張し、前者において「私〇」は「新規話題を導入する機能」があると論じている。そして後者において「私は」は「対比」の意味合いを、「私〇」は「自分の経験や考えを聞き手に分かってほしい」という話し手の発話態度を表していると指摘している。

以上の先行研究から、一人称代名詞が話し手への言及を明確にする機能だけでなく、語用論的・相互行為的な機能を果たしていることが明らかになった。さらに、「私〇」と「私は」が異なる働きをする可能性があることが示唆されている。しかし、これらの先行研究は一人称代名詞を含んだ発話のみ分析し、一人称代名詞が産出される連鎖環境と、それらの使用により、会話参与者

たちが何を成し遂げているのかについては分析していない。本研究では、「私は」と「私〇」が繰り返して使用される特定の位置、すなわち、「質問－応答」の連鎖における応答発話に焦点を当て、応答発話を産出するうえで一人称代名詞が重要な働きを果たしていることを明らかにする。さらに、「私は」と「私〇」によって達成される相互行為上の働きに違いがあることを記述する。

3. 分析データ

本研究では次の二つのコーパスを使っている。(1) 2018年12月に公開された『日本語日常会話コーパス』(CEJC)のモニターデータ(小磯他2019)である。このコーパスには、126会話、約50時間(平均2.5時間/1人)のデータが収録されている。家族、友人知人、仕事関係者、学校等の関係者、公共商業サービス関係の会話者間の会話であり、仕事学業、家事雑事、食事、社会参加、私的活動、移動、休息など、多様な活動が収録されている。(2) 宇佐美まゆみ監修(2018)『BTSJ日本語自然会話コーパス(トランスクリプト・音声)2018年版』の中で、音声データのある日本語母語場面初対面会話31組を用いた。この二者間対話は約8時間40分にわたり、会話参加者は26名である。

4. 分析

「質問－応答」連鎖における質問は、次の発話において、応答という特定のタイプの発話が行われること、また質問の形式に適合した応答がなされることを要請している(串田・林2015)。しかし、質問を向けられた者がその要請に応じるような発話を産出できない時、「質問に適合した応答を産出せよ」という要請と、その要請に応じることを妨げる事情とを、どのように調停したらよいか」という実際の課題に直面することになる(串田・林2015)。本節では、応答者が自分に関する情報を質問された時、質問の内容だけでなく、質問行為にかかわる諸事実と、自分の事情の間に、何か調停しなければならない問題に直面した際に、その問題をどのように解決していくかを分析する。また、応答者がその問題をどう理解しているかによって、「私〇」と「私は」を使い分けていることを記述する。次の4.1では、話し手が「私〇」を用いて応答発話を組み立てることにより、何を成し遂げているかを明らかにする。

4.1 「私〇」が用いられる応答発話

この節では無助詞「私〇」が用いられる「応答発話」の事例を、会話分析の観点から詳細に分析する。まず、次の断片を検討しよう。Aは埼玉に住んでいて、東京にある会社まで通勤電車通っている。この断片の直前で二人は東京の電車には人が多いことに共感し合っていた。

(1) BTSJ_182_03:58-

- 01 A: 地方で(.)働け(h)たら働きたいっていうのもあるんですよね(h).=
 02 =今: :私:会社が: .hh 新宿のほうにありまして,
 03 C: [°はい°

- 04 A: [°で°, 逆に:あの:(0.5) 全国 (h) 展開してないので:(h)hh,
 05 C: あ:じゃま異動とかもない(.) [().
 06 A: [そう=
 07 (中略)(Aは異動がめったにないことについて説明している.))
 08 (1.0)
 09 A: それで:(1.0) ほ()ほとんどないん:で, (2.5)()だけ:やっぱり (0.5) ゴミ
 10 ゴミして:て, やっぱり, さい - 私:住んでる埼玉のほうとかでも (0.5) なんかオフ
 11 イスでもあれば, そっちの:そっちでも (h) いいな:っていう気がするんですけれ
 12 どね (h). .h(0.5) やっぱり:(0.5) 都心:::にどんどん集中してま(.)すからね.
 13 (2.5)
 14 → C: あっちですか? 川:越とか, 熊:谷とか.
 15 → A: いや, 私ただ(.)あの:東京のすぐ隣の川口ってところなんですけ [ど.
 16 C: [あ:川口.
 17 A: え:

Aは01行目で「東京は人が多い」という先行発話に関連づけ、地方で働きたいという自分の望みを言い出し、会話を継続させている。しかし、Aは01行目に対する聞き手の反応を待たず、次の順番構成単位 (turn constructional unit; TCU) に「走りこんで」、勤めている会社の情報を提供している (02行目と04行目)。Aは02行目で「走りこんで」自分がなぜ地方で働きたいと思っているのか理由を述べることにより、「自分の望み」が聞き手にやや唐突さを与える可能性があることに対処するべく、01行目で述べたこと的前提となっていることに言及している。これに対し、05行目でCは「あ:」と、Aが提供した情報を新しい情報として受け入れた後、それに基づいて「異動とかもない」と自分の理解を示す。06行目でAが「そう」とCの理解の適切さを承認した後、続いて今の会社に人事異動がめったにないことについて説明を加えている。その後、聞き手が反応せず、1秒の長い「間合い」が生じたため (08行目)、Aが再び発話の順番を取る。09行目で「それで:(1.0) ほ()ほとんどないん:で」と先行発話をまとめ、「さい-私:住んでる埼玉の方とかでもオフィスがあれば」と、働きたい場所を「地方」から割と東京に近い「埼玉県」に「格下げ」して、人が少ない所で働きたいことをアピールしている。Aが「格下げ」した「希望の勤務地」として「埼玉県」を取り上げたということは、「埼玉県」を、「都心」よりはゴミゴミしていない場所として認識していることを示している。

ここで注目したいのは、「格下げ」した「希望の勤務地」を取り上げるとき、「さい-」と言って音を途中停止し、「自己開始自己修復」を行い、「私:住んでる埼玉」を産出した点である。まず、Aは「私:住んでる」を用いて「埼玉」を修飾することにより、「地方」ではないが、人混みから離れた場所の中でわざと「埼玉県」を取り上げる理由を埋め込んでいる。次に、Aが「埼玉」に住んでいることが、人混みから離れた場所で働きたいという望みを述べる最中に言及されたということは、Aが自分の住んでいるところを人混みから離れた場所として認識していることを示

している。このような A の認識は、C にも理解されていることが分かる。すなわち、C は 14 行目で「川：越とか、熊：谷とか」と、埼玉県の中でも東京から遠い場所を候補として取りあげながら、具体的な A の居住地の地名を確認している。この質問行為は、先行した A の説明、すなわち、A が人混みから離れたところに住んでいることに基づいた想定であることが分かる。これに対して A は、応答の冒頭に「いや」を用いて、14 行目の C の想定を否定し、「ただ」を用いて、この後「居住地」に関する C の想定をすべて否定するのではなく、部分的に修正することを予告している。続けて、A は単なる「川口」ではなく「東京のすぐ隣の」を加えることにより、人混みから離れた埼玉に住んでいるという C の理解（誤解）を招いた自分の説明に「但し書き」を加えている。このように、C の間違った想定は、A の先行した説明により生み出されたため、A はこの位置、すなわち応答位置で、自分に関する情報に修正を加えなければならない事態になっている。そこで、A は自分に関する新たな情報を公表することにより、この事態に対処している。A はあえて「私〇」を明示することにより、自分に関する新たな情報の公表が、単なる C の確認要求に対する応答ではなく、先の自分の居住地についての自分自身の発話に対する修正であるというスタンスを示している。

もう一つの断片 (2) を見ていただきたい。B と S は初対面の会話である。B は福島出身で、現在東京で一人暮らしをしている。S は東京出身である。01 行目で B は「やっぱり (1.0)、東京は暑いですね」と、聞き手の同調を求めている。

(2) BTSJ_205_14:26-

- 01 B: やっぱり (1.0)、東京は暑いですね。
 02 S: (h) あ：ついですか (h).
 03 B: [うん。
 04 S: [hh や、hh 福島けっこう雪降りますよね。
 05 B: あ、そうです [ね、うん
 06 S: [はい
 07 ふ：：：ん
 08 B: ただ夏は福島も (0.5) 温度はけっこう [東京と同じくらいになるんですけど、=
 09 S: [あ：：うん
 10 B: =ただ (.) 夜は (.) 涼しく [なるんで、あっちは。
 11 S: [あ、涼しく、ん：：
 12 東京は蒸し [暑い。
 13 B: [そう、ずっとなんか、夜も暑いから [hhhh
 14 S: [hhhh
 15 B: 辛いですね。
 16 S: あ：東京 - あっ、(福島って) そうなんですね。
 17 (2.0)

- 18 → S: あじゃ：けっこうもう (.) クーラー効かしてんですか、夜↑。
 19 → B: あ、実は僕クーラーないんですよ。
 20 S: あ、(h) ないんで [すか：(h)ahahaha.h
 21 B: [hhhhhhh
 22 S: え：[：：：
 23 B: [だからもう、かなり(0.7)もう [夜は、窓を開けて、
 24 S: [あ：
 25 あ：あ

01行目の東京の暑さに不満を言うBの行為に対し、Sは02行目で不満に同調しない行為を行っている。しかし、すぐ04行目で「や」と、自分の同調的ではない行為に何らかの修正を加えることを予告している。続いて、「福島」に関する知識を示すことにより、二人の出身地の違いに焦点を当て、Bの東京の暑さについての主張に反論しているのではなく、生まれ育った土地の気候の違いによって暑さの受け止め方が異なるという説明を提示しているように思われる。これに対し、BはSの理由説明を受け入れ(05行目)、08行目-10行目で夜の暑さに焦点を当て、東京と福島の気温について説明している。これに対し、Sは理解を示し(11-12行目)、BはSの理解を受け入れ、13行目と15行目で東京は「夜も暑い」という不満をいう。しかし、SはBの不満に対し同調する代わりに、このBの不満をニュースとして受け入れている(16行目)。

17行目の2秒の「間合い」のあと、Sは「あじゃ：」と、先行した東京と福島の夏に関するやり取りを踏まえて会話を進めていることを示し、「けっこうもう (.) クーラー効かしてんですか、夜↑」と質問している(18行目)。この質問より、まず付け加えた「夜↑」は、夜は福島の方が涼しいといったBの説明を理解したうえでの質問であることに志向していること、またBの部屋にクーラーがあるということを前提としていることが分かる。これに対しBは19行目で「あ」を用いて、Sの質問行為が不適切であるというスタンスを示し(Heritage 1998)、「実は僕クーラーないんですよ」と、自分に関する新たな情報を産出することにより、Sの質問が示す前提を否定する。このように、断片(1)と同じく、「僕」より始められた応答発話は、肯否質問に「はい」「いいえ」と端的に答えられない状況で、質問が示す前提を否定する形として、自分に関する新たな情報を提示している。

以上の分析から、「私〇」が用いられる応答発話は、質問行為に端的に情報を提供できない場合に産出されることが分かった。また、質問行為の想定・前提などに何らかの不適切性があり、その不適切性を明らかにするために、自分に関する新たな情報を提供する場合、明示的な「私〇」が用いられることが分かった。

4.2 「私は」が用いられる応答発話

この節では、「私は」が用いられる応答発話の事例を分析し、一人称代名詞に助詞「は」が付くか付かないかによって、相互行為的な機能に相違点があるのかについて検討していく。

断片 (3) は、M (母親) が自宅で息子三人 (長男 S, 次男 Y, 三男 T) と昼ご飯を食べながら、映画について話している場面である。断片の直前で、S は横須賀の映画館で『アメリカン・スナイパー』を見たが、同じタイミングで「コナンの映画」²が上映されていて「笑えた」ことを語っていた。S の発話が終わると同時に、Y は S の語った「コナンの映画」(『異次元のスナイパー』) のストーリーに関して語り始める。息子三人はこの映画を見たことがあり、三人で映画のストーリーを確認しながら話し合っていた。01 行目は Y が『異次元のスナイパー』に関して語った後、3.5 秒の間合いが生じたあとに産出されている。

(3) CEJC_K004_017_6:10-

- 01 M: Y ちゃん, 観に行ったんだっけ. =
 02 Y: = 『異次元のスナイパー』観に行ったよ. [(宮本) [んちで.
 03 M: [そうか.
 04 T: [俺も.
 05 S: でも結局 あともう一つおかしいのが弾丸が(ヤンカム)(.)種類が変わっちゃった
 06 ってゆうのが問題(.)なんか(.)怪しまれちゃった原因じゃん.

((07-23 行目中略: Y, S, T が『異次元のスナイパー』について語り合っている))

24 (2.0)

- 25 M: S ちゃんも観たんだっけ.
 26 → S: >俺は<DVD で観た.
 27 M: あっ, そうなんだね., え?いつの間に.
 28 T: お母さんも観たと思うよ.
 29 M: お母さんも?

25 行目で M は S に「今語っている映画」を観ていたことを確認している。ここで注目したいのは「S ちゃんも」という発話である。この質問は「『異次元のスナイパー』を観た人」というグループの存在を前提にしている。すなわち、01-04 行目のやり取りで Y と T が『異次元のスナイパー』を観に行ったことが明らかになり、それにより「『異次元のスナイパー』を観た人」というグループが喚起されている。「S ちゃんも」は「『異次元のスナイパー』を観た人」というグループに S が属しているのではないかという認識を示している。また、「～っけ」という形式を用いることで、S が「『異次元のスナイパー』を観た人」というグループに属していることに確信がないことを示している。つまり、この質問は、S が「『異次元のスナイパー』を観た人」というグループに属していることは知らなかったが、映画の内容に詳しい息子たちのやり取りに照らして、S が当該グループに属しているかもしれないという自分の認識を確認する行為である。

この確認要求に対し、S は単に「うん」、「観た」と答えるのではなく、「俺は」と「DVD で」を加えて答えている (26 行目)。これは、質問に単に端的に答えることは、Y, T と同じ経験を

²「コナンの映画」とは、「名探偵コナン 異次元の狙撃手 (スナイパー)」という映画のことで、『アメリカン・スナイパー』という映画と同じく、「スナイパー」を題材にした映画である。

したことを承認することになるという問題にSが志向し、それに対して対処していることを示している。すなわち、SはY、Tと同じく『異次元のスナイパー』を観たことを示しつつ、YとTは「映画館に観に行った」のに対し、自分は「DVDで」観たため、経験の手段に違いがあることに志向し、その違いを「俺は」によって明確にしている。

次の断片(4)を見てみよう。O、S、Nは英会話教室の友人である。SはOとNより少し年齢が上である。断片(4)の直前のやり取りでは、NがSに海外はどこに行ったかと質問し、それに対し、ビジネストリップはシンガポールくらいしかないけど、遊びで2年前にロンドンに行くとSが応答している。その後、ずっと雨だったことや、食事が噂の通りまずかったと語っている。それを聞いて、01行目でOが「実際どうまずかったんですか」と聞いている。

(4) CEJC_T001_014_40:06-

- 01 O: 実際どうまずかったんすか。
 02 S: なんだろう。あの:(1.3)なんか(.)バリエーションがまずない。
 03 O: あ:[は:は:
 04 N: [((頷いている))
 05 S: で(.)あっ(.)ちょっとこれはうまいなと思ったらイタリア料理とか[だった。
 06 O: [うふふ
 07 N: [> そうそうそうそうそうそうそうそうそう <
 08 S: [基本現地の料理じゃない, うん。
 09 O: [hhhhhhhhhh
 10 N: そうなんすよね。
 11 S: うん
 12 N: わたしも [(1.0) 四年前?(.) 三年前?
 13 S: [味が(.) 単調?
 14 うん。
 15 N: 行きましたよ。[ロンドン。
 16 S: [お:::ん。
 17 → O: あっ、新婚旅行で?
 18 → N: 新婚旅行ですね、[僕は。
 19 S: [あ: そうなん。
 20 味が単調: に [すごい感じ[た。
 21 O: [hhhhhh
 22 N: [ね:。
 23 フィッシュポテト食べてないっすけどね:。
 24 S: あっ、フィッシュアンドチップス食べた 食べた。
 25 N: あ: 食べました?

まず、注目したい所は、Sがロンドンに関する情報を語った後、聞き手であるOとNの受け止め方の違いである。Oはロンドンの食事について質問した者でもあり、Sの応答に対して「あ:」(03行目)と、Sが語った情報により自分の知識状態が変化したことを示している。一方、Nは、07行目と10行目で強制的に同意することによって、Sの提供した情報が自分の知識状態と一致していることを示し、「共通の経験」を持っている者としてふるまう。さらに12行目と15行目では「ロンドンに行ったことがある」と、Sと共通の経験を持っていることを明確化し、自分の語りを開始している。これを聞いて、Oは「あっ」と何らかの気づきを示した後、「新婚旅行で?」と、Oのロンドン旅行の目的に関する自分の知識状態を確認している(17行目)。Oの質問はNを「ロンドンに行ったことがある者」という上位のグループの中で、「新婚旅行でロンドンに行った者」という下位のグループに属しているのではないかと確認している行為である。これに対し、Nは単に肯定するだけでなく、「新婚旅行」というOが産出した「旅行の目的」を表す言葉を繰り返して応答を産出し、さらに「僕は」と続け、応答発話のTCUを「延長(increment)」している。このように「僕は」を付け加えることにより、Oの質問によって明確にされた自分の「旅行の目的」が、Sの「旅行の目的」と異なるという認識を巧みに表している。すなわち、Oの質問に対し応答することにより、Sと同じく「ロンドンに行ったことがある者」として自分の経験を語っているが、Sは「一般の旅行でロンドンに行った者」であるのに対し、自分は「新婚旅行でロンドンに行った者」であることを明確にしている。ここでも断片(3)と同じく、Nは「僕は」を用いて「ロンドンに行ったことがある者」というグループの中で、自分が他のメンバーと事情が異なることを明確にしている。

もう一つの断片(5)を見てみよう。断片(5)の会話参加者SとTは、高校時代の友人で、中華レストランで食事をしている。Sは何年かぶりに、Tは半年ぶりにこのレストランにきた。二人は「いただきます」といった後、Tは、テーブルに置いてあった小籠包を食べた。一方Sはウェットティッシュで手を拭いている。Sは01行目で「よし」と言いながら、箸を取った。

(5) CEJC_K003_012a_00:10-

- 01 S: よし. どうやって食べるんだっけ?
 02 → T: あなんかまず :(.) わたしは汁(0.6) [肉 - 肉汁吸ってから:
 03 S: [あ, 吸うんだよね.
 04 T: [で:
 05 S: [h(h) 言い方 やめて (h) [あは hh[hhh
 06 T: [hhh うふ何? hhh °何° .
 07 S: 肉汁吸ってから(って)めっちゃ野心的だね.
 08 T: でそんで:これ生姜に醤油付けて:乗っけてぱくって食べる.
 09 [((小籠包を一口で食べる))
 10 S: [((箸で小籠包の皮を剥ける))はい.
 11 T: うまい.

01 行目で S は T に小籠包の食べ方について聞いている。この質問の形式は次の三つのことを示している。まず、小籠包を食べている T に質問しているということは、T を「小籠包の食べ方を知っている者」として認識していることを示している。また、「食べる」という現在形を用いることにより、自分が要求している食べ方は、小籠包を食べる人たちが従うべき、何か決まった食べ方があるという認識を示している。さらに「っけ？」を用いていることにより、自分が小籠包の食べ方が分からないわけではなく、過去の経験で得た小籠包の食べ方を思い出せないこと、つまり自分も食べたことがあることを示している³。すなわち、この質問は、「小籠包の食べ方を知っている者」というグループを喚起し、T も S もこのグループに属していることを示している。これに対し、02 行目で T は「あ」と S の質問が予想できなかったことを示した後、「なんか」と、質問に対する説明を与えることに志向し、端的に説明を与えることができないことを示している。また「まず」を用いて、後続発話で段階に分けて説明を構成することを予示している。しかし、「まず」に続き、小籠包の食べ方を説明するわけではなく、「私は」を産出している。これは、自分の説明行為を、一般的な食べ方ではなく、「自己流」の食べ方であることを明確に示している。すなわち、質問によって要請された「小籠包の食べ方」が、人によって異なる可能性があることに志向している。このように、T は「小籠包の食べ方を知っている者」に属しているが、それに属する他のメンバーと異なる食べ方をしているかもしれないことを「私は」により示している。

この節では、応答発話が一人称代名詞に「は」が付いている形式によって構成された断片を分析した。三つの断片とも、質問発話により、応答者が何らかのグループに属する者として認識されている。すなわち、断片 (3) では『異次元のスナイパー』を観た人」というグループに属する者として、断片 (4) では「新婚旅行でロンドンに行った者」というグループに属する者として、断片 (5) では「小籠包の食べ方を知っている者」というグループに属する者として認識されている。これに対し、応答者は質問行為によって喚起されたグループに属する者であることは否定しないが、先行文脈で出現した同グループのメンバーとは、多少異なる仕方で経験していること（断片 (3)、断片 (4)）、またはその可能性があること（断片 5）を、「私は」により明示的に示している。

言い換えれば、質問行為によって、先行文脈で明確に出現した、あるいは暗黙に在る登場人物が、ある上位グループの下位グループのメンバーとして認識される。応答者は、質問に「私は」を用いて応答することにより、先行発話に登場した人物が属する下位グループから、話し手自身を除外し、異なる下位グループに属することを明確にしている。このように、応答発話で用いられた「私は」は、単に話し手自身と、先行文脈で明確に出現した、あるいは暗黙に在る登場人物を「対比」というよりは、先行した登場人物が属するグループから抜き出すことを示している。それにより、先行文脈で喚起された活動・行為・経験に自分も携わっているが、他の参与者と何らかの違いがあることに気づき、そのスタンス・認識を明確にしている。

³ このようなスタンスは 03 行目でも表している。02 行目で T が「汁」を産出してから 0.6 秒の間合いが生じた際、S は 03 行目で「あ」と何か想起したことを示し、「吸うんだよね」と T が始めた TCU を「先取り」して、統語的に完了させようとしている。

5. まとめ

本研究では、日本語母語話者が一人称代名詞「私〇」（断片 (1), (2)）と「私は」（断片 (3), (4), (5)）とを用いて、応答発話を組立てる現象を、会話分析の手法を用いて分析した。「私〇」と「私は」が用いられる応答発話は、いずれも単に質問行為が作り出した文脈を受け入れるのではなく、何らかの「調整」を行う際に用いられていることが分かった。話し手は一人称代名詞を明示することにより、「今ここでその調整を成し遂げている」という志望を強く示している。言い換えれば、話し手は特定の時点で特に注意を向けて受け止めてもらうこととして自分に関する情報を提供する際に一人称代名詞を使用している。

また、「私〇」と「私は」が用いられる応答発話を分析することにより、二つの形式が相互行為上、異なる問題に志向していることが分かった。「私〇」が用いられる応答発話は、応答者に関する質問行為が提示している想定・前提などに、何らかの不適切性があることを感知した時に用いられ、その不適切性を生み出した情報を修正するものとして、自分に関する新たな情報を提供しているというスタンスを、「私〇」を用いて明確に示していた。

一方、「私は」が用いられる応答発話は、先行文脈や質問によって、応答者が特定のグループのメンバーとして理解されていて、その質問を無条件に受け入れるには、当該のグループの他のメンバーと多少異なるところがある際に用いられることが分かった。話し手は「私は」を明示することで、自分が質問によって喚起されたグループに属することを承認しつつ、当該のグループの他のメンバーとは異なる側面があることを示している。すなわち、質問によって要請されている自分の経験・状況が、他のメンバーと共有できる経験・状況ではあるが、多少異なる仕方で共有されている、もしくはその可能性があることを示していた。

このように、応答者は要請されている質問内容だけでなく、質問行為のさまざまな側面に注意を向けている。そして、質問行為の何らかの側面に不適切性が生じた場合、その不適切さを、応答者としてどうとらえているのか、またどのように対処しようしているのかを、一人称代名詞を用いて示している。さらに、「私〇」と「私は」を使い分けることにより、質問行為に対する話し手の異なる捉え方や対処方法を示している。

参考文献

- 宇佐美まゆみ監修 (2018) 『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2018 年版』国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブ・プロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」(リーダー: 宇佐美まゆみ).
- 苅宿紀子 (2014) 「談話における自称詞のいわゆる「無助詞」現象一言わなくても分かる時に言う「わたしは」の機能一」『表現研究』99: 40-49.
- 金青華 (2021) 「応答発話に用いられる「私は」と「私〇」」『言語資源活用ワークショップ 2021 発表論文集』313-319.
- 串田秀也・林誠 (2015) 「WH 質問への抵抗—感動詞「いや」の相互行為上の働き—」友定賢治 (編) 『感動詞言語学』169-211. 東京: ひつじ書房.
- 小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉 (2019) 「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の設計と特徴」『言語処理学会第 25 回年次大会発表論文集』367-370.

- 張希朱 (2014) 「質問の答えに表れる一人称代名詞の明示と暗示」『日語日文学研究』91: 415-430.
- 西阪仰 (2008) 『分散する身体：エスノメソドロジー的相互行為分析の展開』東京：勁草書房.
- 西阪仰・串田秀也・熊谷智子 (2008) 「特集『相互行為における言語使用：会話データを用いた研究』について」社会言語科学会『社会言語科学』10(2): 13-15.
- 水谷信子 (1985) 『日英比較 話し言葉の文法』東京：くろしお出版.
- 森田良行 (1998) 『日本人の発想，日本語の表現—「私」の立場がことばを決める』東京：中公新書.
- Heritage, John (1998) Oh-prefaced responses to inquiry. *Language in Society* 27: 291-334.
- Jefferson, Gail (2004) Glossary of transcript symbols with an introduction. In: Gail Lerner (ed.) *Conversation analysis: Studies from the first generation*, 13-31. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Ono, Tsuyoshi and Sandra A. Thompson (2003) Japanese (w)atashi/ore/boku 'I': They're not just pronouns. *Cognitive Linguistics* 14(4): 321-347.
- Sacks, Harvey, Emanuel A. Schegloff and Gail Jefferson (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50(4): 696-735.
- Schegloff, Emanuel A. (2007) *Sequence organization in interaction: A primer in conversation analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.

トランスクリプトの記号の一覧

会話データの転記（トランスクリプト）は Gail Jefferson によって開発されたシステム（Jefferson 2004）をベースに、日本語向けに整理された西阪・串田・熊谷（2008）を主に参考にしている。

[発話の重なる開始位置	.	直前の部分が下降調抑揚である
(m.n)	間合いの秒数	,	直前の部分が継続を示す抑揚である
(.)	0.2 秒以下の短い間合い	?	直前の部分が上昇調抑揚である
発話：：	直前の音が延ばされている。コロンの数は引き延ばしの相対的な長さに対応している	↑	直後の音調が極端に上がっている
=	二つの発話が密着している	-	直前の音が中断されている
.h	吸気音，息継ぎや笑いなどを示す	(発話)	聞き取りが難しい発話
h	呼気音，笑い声などの破裂音を示す	¥ 発話 ¥	笑っているような声の調子で発話されている
(h) 発話 (h)	笑いながら発話している	< 発話 >	顕著にゆっくり発話されている
° 発話 °	囲まれた部分の音が相対的に小さい	> 発話 <	顕著に速く発話されている
		→	分析対象が含まれているターン
		(())	トランスクリプト作成者の注釈

Usage of Zero Particle “Watashi” and “Watashi wa” in Second Pair Parts of Question-and-Answer Sequences

JIN Qinghua

Graduate student, Tsukuba University / Project Collaborator, NINJAL

Abstract

This study uses conversation analysis to examine the role of first-person pronouns in talk-in-interaction, specifically by analyzing how native Japanese speakers use first-person pronouns in building answering utterances. It compares utterances where the topic particle “wa” follows “watashi” and use zero particle “watashi.” This process demonstrates that speakers use zero particle “watashi” and “watashi wa” to solve different interactional problems. Zero particle “watashi” is used by speakers to project the stance that they are making new information about themselves available to correct a perceived misconception on the part of the questioner. In contrast, it was found that “watashi wa” is used by speakers to indicate that, while they do not deny belonging to the membership category posited by the questioner, there may be slight differences between them and other members evoked in previous talk or there is a possibility that they are not of the same type.

Keywords: first-person pronouns, particle “wa,” zero particle, question-answer sequence, conversation analysis